短大・高専・専門学校生の自校の教育に対する期待

大学入試センター　中　島　直　忠
大学入試センター　池　田　輝　政

Abstract

The Students' Expectation of Education at Junior Colleges, Technical Colleges, and Special Training Schools

Naotada NAKAJIMA
Terumasa IKEDA
National Center for University Entrance Examination

In an age of increasing popular function in higher education, we are successively studying the value of higher education, above all, educational value added for students.

We undertook a survey of the student consciousness on Feburary and March in 1980. The respondents were the 803 students who took the final courses at a junior college, or a technical college, or a special training school.

We presents the results of the survey concerning the skills and traits that the students could attain during school years. The framework of these skills and traits consists of the following three categories: (a) cognitive learning, (b) emotional and moral development, and (c) practical competence. We worked up the framework by referring to a catalogue of educational goals which was contained in the book "Investment in Learning" authored by Howard R. Bowen.

Based on the obtained relative frequency tables, we summarize, especially, our findings common among the most respondents of each school as follows:

(1) Concerning expectation of college or school education, the most students desire the attainment of the following skills and traits; (a) national language skill, substantive knowledge in their selected fields, ability to think rationally, and intellectual tolerance; (b) psychological well-being, understanding and throughtfulness in human relationships, and values and morals; (c) need for achievement, leadership relating to willingness to assume responsibilities, knowledge and skills needed for first job.

(2) Concerning contribution of college or school education, the most students affirm the attainment of the following skills and traits; (a) quantitative skills, substantive knowledge in their selected fields, ability to think rationally, intellectual tolerance, and lifelong learning; (b) personal self-discovery, psychological well-being, understanding and throughtfulness in human relationships, and values and morals; (c) need for achievement, adaptability, leadership relating to willingness to assume responsibilities, capacity needed for adaptability to a workplace.

I　調査の趣旨と概要

1. 調査の趣旨

高等教育の大衆化が年ごとに進行し、その教育の質が問われている現在、そこに学ぶ若者達がいかなる意義の学園生活を送っているのか、その実態と意識を解明し、またそのほかの問題点の解明をも含めて、日米両国について比較研究を試みるため、われわれを含む共同研究グループである高等教育研究会（代表、中島直忠）は、「大衆化時代における高等教育の政策と制度」との研究課題で、昭和53年度以降3年間、科学研究費補助金による研究を進めている。

本論文は、その一環として昭和54年度に実施した国内の短期大学2校・工業高等専門学校2校・専門学校2校の学生・生徒を対象とするアンケート調査のうち、自校の教育の目標としてふさわしい資質・

能力に関する部分について、その回答内容を考察し、これら諸高等教育機関の教育の現状がはらむ問題点を解明しようとするものである。

2. 調査対象と調査方法

昭和53年度に4年制大学の学生を対象とするアンケート調査を実施したが[1]、今回はこれと異なる学校種別の高等教育機関である短期大学、工業高等専門学校及び専門学校（専修学校のうち高等学校卒業を入学資格とするもの）の学生・生徒を対象として、前回と同趣旨のアンケート調査を実施し、4年制大学を含め4種類の高等教育機関の学生・生徒の意識を比較考察できるようデザインした。

今回の調査では、短大は2年次学生、工業高専は5年次生徒、専門学校は1・2年次生徒を対象とした。

また、学生・生徒の専攻をできるだけ同種のものに揃えるため、6校とも工学系を選び、しかも、電気工学・電子工学・通信工学系統の学科を中心に選び、その学科に属する者の全部を対象とすることとした。したがって今回の調査は、より厳密には電気・電子・通信工学を中心とする工学系の短大等における学生・生徒集団の傾向を探査するものと言えよう。

調査対象者に関する統計は表1のとおり。回収率71%、有効回答数合計802票である。また、対象となった各校の諸属性をイメージ・アップしていただくため、そのプロフィールを表2に示しておく。

調査方法は、アンケート票による意識調査である。その内容は次項に記す。アンケート票の記入については、対象各校の責任者の方々に、われわれが調査対象として選んだ各学科の2(5)学年生（F校のみ1年生が加わった）の全員を対象としていただいた。この機会にこの調査に多大の御協力を賜わった関係各位の方々に深く感謝の意を表するものである。

表1　アンケート調査対象者

学校	学年	サンプル 学年	サンプル 配布数	回収数	有効数
A 短大	2学年	電子工学科	160	85	85
B 短大	2学年	電波通信学科	63	70	70
		通信工学科	41		
		電子工学科	67	28	28
		計	171	98	98
C工業高専	5学年	電気工学科	37	36	36
		機械工学科	67	130	130
		工業化学科	33		
		金属工学科	39		
		計	176	166	166
D工業高専	5学年	電気工学科	31	31	31
		電子工学科	34	34	34
		機械工学科	34	64	64
		工業化学科	31		
		計	130	129	129
E専門学校	2学年	電気工学科	94	77	77
		電子工学科	122	70	70
		不明	0	1	1
		計	216	148	148
F専門学校	1·2学年	電気工学科	224	142	142
		電子工学科	52	35	35
		計	276	177	177
合計			1,129	803	803

回収率　71%

調査時期は、昭和55年1月 ── 2月の間である。

3. 調　査　内　容

前年度の4年制大学学生を対象とする調査において、大学教育の目標としてふさわしいと考えられる資質・能力を、42項目列挙して、これについての期待度と修得度を質問した。この42項目は4年制大学のみでなく広く高等教育機関一般において、目標としてふさわしい内容であると考え、予備調査を経て、

表 2　対象校のプロフィール

	A　短　大	B　短　大	C 工業高専	D 工業高専	E 専門学校	F 専門学校	備　考
設置関係	私　立	国　立	国　立	国　立	私　立	私　立	
学科構成	○電子工学科 （電子工学コース 電子計算機コース）	○電波通信学科 ○通信工学科 ○電子工学科	○機械工学科 ○電気工学科 ○工業化学科 ○金属工学科	○機械工学科 ○電気工学科 ○電子工学科 ○工業化学科	○電気工学科 ○電子工学科 電子情報処理科 その他　9学科	○電気工学科 ○電子工学科 設備工学科	○印……調査対象とした学科または課程
課程（昼・夜）	○昼間課程	○夜間課程	○昼間課程	○昼間課程	○昼間課程 ○夜間課程	○夜間課程	
修業年限	2　年	3　年	5年（ただし、高等教育段階は2年）	5年（ただし、高等教育段階は2年）	2年課程（全被調査者が属す）1年課程	2　年	
規模（学生・生徒定員）	200人×2＝400人	240人×3＝720人	200人×5＝1,000人	160人×5＝800人	昭54年度在籍者 約　700人		
共学・別学	共学　電子計算機コースには女子が多い	共　学 （男子が大部分）	共　学 （男子が大部分）	共　学 （男子が大部分）	共　学	共　学 （男子が大部分）	
入学難易度	工学系の短大の中では、容易な方とみられる。	工学系の短大の中では、かなり難度が高い。	中学校からの志望時において、難度が高い。	中学校からの志望時において、難度が高い。	入学者選考は書類審査による。	入学者選考は書類審査による。	
沿革	昭35　創立	昭28　4年制大学に併設 昭33　通信工学科増 昭41　電子工学科増	昭39　設置	昭40　設置 昭45　電子工学科増			
校風・特色	母体の学校法人は、4年制大学も設置しているが、これらは昭29創立の電子工業専門学校以来、エレクトロニクス教育に特色をもつ。 地方大都市に立地し、学生にそこの住民が多い。電子計算機コースは、女子の技能修得上定評がある	母体の4年制大学は電気通信関係の専門校として傳統あり。その施設を活用できるのが強味。 大都市近郊に立地するので、都市中心部からの自動車通学もみられる。	高専制度当初からの国立工業高専なので、広域各県から生徒が集まる。	高専制度当初からの国立工業高専なので、広域各県から生徒が集まる。	実験設備、実習用電子計算機を整備し実力ある技術者の養成をめざす。 大都市中心部に立地する。	電機専門の各種学校として傳統あり。同一法人は4年制大学・短大も設置し、実験・実習設備が充実している。 大都市中心部に立地している。	

表3　高等教育の目標としてふさわしい資質・能力

資質・能力カテゴリー	資質・能力サブカテゴリー	資質・能力項目
a 知的学習	(1)日本語能力	Q7. 日本語文献を読んで理解する能力を養う（読む力）
		8.論文・レポートをはっきりわかるように書く能力を養う（書く力）
		9.自分の考えを筋道をたてて話す能力を養う（話す力）
	(2)外国語能力	10 外国語文献を読んで理解する能力を養う（読む力）
		11 外国語を正しく聞きとる能力を養う（聞く力）
		12 外国語で自分の考えを筋道をたてて話す能力を養う（話す力）
	(3)数理能力	13 数学の基礎概念を理解する能力を養う（数学）
		14 統計上の単純なデータを理解し、処理する能力を養う（統計）
	(4)知識・教養	15 伝統的な西洋文化・東洋文化についての基礎的理解をもつ
		16 現代の人文・社会・自然の諸科学、芸術などについての基礎的理解をもつ
		17 自分の専門とする領域に関する基礎知識を充分にもつ
	(5)合理的思考力	18 事実を独断や感情をまじえず、客観的にみる力を養う
	(6)知的寛容	19 既成の権威にとらわれず、自由に物事を考える力を養う（自由な思考）
		20 複雑でめんどうな問題に恐れず取り組む探求心を養う（果敢な探究心）
		21 物事には民族や文化により様々な見方・考え方があることを認める態度を養う（多元性の認識）
	(7)美的センス	22 文学・美術・自然の美しさに関する知識・関心・鑑賞能力を高める
	(8)創造性	23 新しい仮説やアイデアを作り出し、または芸術作品を創作する創造力や独創性を養う
	(9)継続的学習意欲	24 在学中に学習の仕方を学んでおく
b 情緒と道徳の発達	(10)自己発見	25 自分の能力・志望・価値観を知る（自己認識）
		26 自分がかけがえのない人間であることを自覚する（自覚）
	(11)心理的健全さ	27 適切な自己主張・自信・自発性を養う
	(12)他人理解	28 他人に対する共感や思いやり・協調性を養う
	(13)価値観とモラル	29 社会に対する関心と責任感を身につける
	(14)宗教的関心	30 宗教的なものについて真面目に探求する姿勢を養う
	(15)趣味・行儀作法の洗練	31 洗練された趣味や礼儀作法を身につける
c 実生活上の能力	(16)達成意欲	32 ものごとをりっぱにやりとげようとする意欲を養う
	(17)未来志向	33 事前に慎重に準備し計画する能力を養う（計画能力）
		34 将来に対する冷静で客観的な見方を身につける
	(18)適応性	35 困難や危機をうまく処理していく能力を養う（処理能力）
		36 人とよく相談してものごとを進める能力を養う（協調的能力）
	(19)リーダーシップ	37 責任をもって物事を処理する姿勢・態度を身につける
		38 組織をつくり、組織を動かしていく力を養う（組織力）
	(20)市民性	39 政治のしくみや政党の政策・主張を正しく理解する能力を養う
		40 政治・経済・教育・福祉などに関する諸団体に、積極的に参加していこうとする態度を養う
	(21)職業生活の準備	41 希望職種に関する知識・技能を身につける
		42 新しい仕事や職場に適応する能力を養う（職場適応力）
	(22)家庭生活の準備	43 安定した家庭をつくりあげる能力を身につける（生活設計力）
		44 子どもを育てるための知識や能力を身につける（育児能力）
	(23)消費者としての能力	45 じょうずな消費生活を送る方法を身につける
	(24)充実した余暇	46 仕事やレジャーその他の活動に、時間をうまく配分する力を身につける
		47 卒業後も余暇の時間を利用して、ずっと勉強・学習していく態度や能力を身につける
	(25)健康	48 心身の健康を維持・向上するための知識を修得する

今回もほとんど同内容の42項目をアンケート票に列挙した。その内容は表3の「資質・能力項目」欄に掲げるQ7－Q48である。

このうち、Q17のみについて表現を若干修正した。前回の調査では次の表現をとっていた。

Q17　専攻領域に関する基礎知識を充分にもつ

次に、これらの資質・能力の各項目について、修得度と期待度をきくために、下記の設問を設けた。

次の7から48までの項目ごとに、在学中の学校であなた自身が、(A)修得した程度と、(B)修得することが重要だと考える程度を答えてください。A、Bのそれぞれの欄に1つの回答を選んでチェックしてください。なお、

(ア)　この問題は、あなた自身のことをお尋ねしています。学生・生徒一般についての御意見を聞いているのではありません。

(イ)　A、B欄のどちらも、授業など学校側が与えてくれるものだけについて答えるのではなく、学校における課外活動、交友関係、教師＝学生の人間関係など、学園生活全体について答えてください。

A．あなたがこれまでに身につけた程度は、次のどれですか。
(1)　身についてない
(2)　ある程度
(3)　充分に

B．あなたが修得することが重要だと考える程度は、次のどれですか。
(1)　重要でない
(2)　ある程度
(3)　必要不可欠

設問のなお書き(ア)についてであるが、回答が短大等の学生・生徒一般についての抽象的なものになっては信頼性の低いものとなるので、これを防ぐため、回答者が在学中の学校に関して自己自身の具体的な意識を表明するようにした。また、(イ)については、回答を考える際に、「在学中の学校で」という言葉を広く学園生活全体について扱われるようにした。

さて、42の資質・能力項目の設定に当ってハワード・R・ボーエンが提示した大学教育目標の枠組[(2)]を参考にしたのは、前年度の調査の場合と同じである。これらの項目を概括すると、表3に示すとおり、(a)知的学習、(b)情緒と道徳の発達、(c)実生活上の能力の3カテゴリーに大別され、さらにそれらは合計25のサブ・カテゴリーに分類される。このカテゴリーとサブ・カテゴリー、並びに資質・能力項目欄のうち（ ）内の注釈は、アンケート票には示していない。

なお、このアンケート票には、フェース・シートやその他の4項目の設問（学業成績など）を含んでいるが、本論文では、主として上記の資質・能力についての設問に対する回答を集計処理して考察を報告する。

（中島）

Ⅱ　度数分布にみる調査結果

調査データ分析の基本的な狙いは、調査対象6校の間にみられる集団的な傾向を抽出することであるが、そのための手順として調査項目そのものの検討及びそれに関連した統計測度の選択・統計処理方法の工夫等が考えられる。今回の場合はこれらの手順に先立ち、今後の分析の出発点となり、全体的な集団の傾向をつかむための基礎作業となる度数分布による調査データの分析結果を報告する。なお掲載した度数分布の数値は比率表示にしてあるので相対度数分布表である。また、回答者の反応型には3段階の順序尺度を採用したが、相対度数分布表には当面必要な尺度部分に関してのみ比率を表示した。

表 4　自校の教育に対する学生の期待（相対度数分布表）

(注)　○印は約40％以上の項目
100％＝「必要不可欠」＋「重要である」＋「重要でない」＋ N.R.

項目＼学校	A 短大		B 短大		C 高専		D 高専		E 専門学校		F 専門学校	
	必要不可欠	重要でない	必要不可欠	重要でない	必要不可欠	重要でない	必要不可欠	重要でない	必要不可欠	重要でない	必要不可欠	重要でない
Q 7	○ 40.0	2.4	34.7	5.1	○ 62.7	0.6	○ 54.3	3.1	34.5	4.7	○ 43.5	3.4
8	○ 44.7	4.7	34.7	6.1	○ 72.3	0.6	○ 70.5	2.3	○ 43.2	2.0	○ 52.5	4.5
9	○ 60.0	3.5	○ 53.1	5.1	○ 81.3	0.6	○ 67.4	2.3	○ 52.7	3.4	○ 62.1	4.0
10	16.5	14.1	35.7	5.1	○ 44.0	2.4	○ 43.4	4.7	25.0	12.2	19.2	13.0
11	17.6	18.8	30.6	7.1	36.7	6.0	25.6	5.4	27.0	10.8	19.2	15.3
12	15.3	31.8	31.6	18.4	24.1	11.4	17.1	24.8	23.0	13.5	15.8	28.2
13	23.5	5.9	31.6	2.0	○ 60.2	2.4	○ 51.2	1.6	39.9	4.1	○ 54.2	1.7
14	21.2	7.1	18.4	8.2	○ 45.2	6.0	34.1	6.2	29.7	9.5	○ 43.5	6.2
15	4.7	22.4	9.2	16.3	18.1	12.0	10.1	25.6	7.4	23.0	14.7	12.4
16	17.6	11.8	13.3	11.2	25.3	8.4	11.6	20.2	12.8	16.9	18.6	8.5
17	○ 51.8	7.1	○ 61.2	4.1	○ 83.7	0.6	○ 78.3	0.8	○ 69.6	2.7	○ 74.6	0.6
18	○ 43.5	2.4	37.8	4.1	○ 56.0	1.2	○ 49.6	2.3	○ 42.6	4.1	○ 57.1	3.4
19	38.8	0.0	39.8	8.2	○ 56.0	0.6	○ 51.2	1.6	38.5	2.7	○ 52.5	4.0
20	○ 47.1	1.2	32.7	3.1	○ 62.0	4.2	○ 49.6	0.8	○ 40.5	5.4	○ 58.2	1.7
21	23.5	11.8	29.6	12.2	39.8	9.6	23.3	7.8	23.0	16.2	36.7	8.5
22	21.2	21.2	25.5	7.1	22.9	9.0	23.3	17.1	10.8	25.0	18.1	9.6
23	12.9	14.1	30.6	7.1	○ 48.2	6.6	○ 46.5	7.8	27.7	14.9	32.8	8.5
24	34.1	11.8	34.7	11.2	○ 44.0	7.8	○ 43.4	7.8	34.5	8.1	○ 41.8	3.4
25	○ 43.5	2.4	39.8	9.2	○ 56.6	3.0	38.8	4.7	○ 47.3	7.4	○ 51.4	4.5
26	31.8	5.9	29.6	4.1	○ 41.0	12.7	31.0	10.1	33.8	12.8	38.4	9.6
27	○ 51.8	1.2	37.8	3.1	○ 63.3	3.6	○ 51.2	2.3	○ 44.6	5.4	○ 49.2	4.5
28	○ 57.6	3.5	○ 48.0	5.1	○ 73.5	1.8	○ 63.6	0.8	○ 53.4	4.7	○ 56.5	2.3
29	○ 54.1	3.5	36.7	1.0	○ 59.0	1.2	○ 46.5	0.8	○ 41.2	1.4	○ 50.8	2.3
30	9.4	○ 50.6	10.2	○ 41.8	10.8	○ 41.6	7.8	○ 59.7	13.5	○ 54.7	10.2	○ 55.4
31	32.9	5.9	22.4	15.3	31.3	9.0	26.4	18.6	20.3	16.9	22.6	16.9
32	○ 44.7	1.2	35.7	9.2	○ 57.8	1.8	○ 47.3	4.7	○ 41.9	2.7	○ 45.2	1.7
33	32.9	2.4	28.6	10.2	○ 47.0	3.6	○ 41.9	1.6	38.5	3.4	39.5	2.3
34	31.8	5.9	35.7	11.2	○ 40.4	4.8	29.5	6.2	31.1	4.7	37.9	2.8
35	35.3	3.5	37.8	5.1	○ 45.8	3.6	34.9	2.3	○ 45.3	4.1	○ 44.1	1.1
36	34.1	7.1	35.7	7.1	○ 43.4	6.0	36.4	3.1	28.4	8.1	32.8	5.1
37	○ 50.6	3.5	39.8	5.1	○ 62.0	1.2	○ 49.6	0.8	○ 43.2	2.0	○ 50.3	1.7
38	17.6	10.6	25.5	9.2	27.1	10.8	24.0	13.2	16.9	19.6	19.2	14.7
39	30.6	3.5	21.4	11.2	16.3	12.7	14.7	23.3	20.9	16.9	14.7	18.6
40	12.9	21.2	19.4	23.5	10.8	24.7	7.0	38.8	14.2	28.4	8.5	24.3
41	○ 45.9	2.4	○ 50.0	4.1	○ 49.4	6.6	○ 56.6	7.0	○ 55.4	4.7	○ 58.8	2.3
42	37.6	5.9	28.6	6.1	38.0	5.4	39.5	5.4	39.9	6.8	29.9	4.5
43	32.9	12.9	30.6	16.3	39.2	14.5	31.8	24.0	31.1	14.9	32.2	9.0
44	○ 40.0	8.2	○ 42.9	8.2	○ 42.2	15.1	32.6	26.4	31.1	15.5	28.8	15.3
45	25.9	5.9	31.6	12.2	31.3	12.0	24.8	24.8	29.1	12.2	18.6	11.9
46	16.5	8.2	23.5	8.2	35.5	12.7	29.5	17.1	20.3	10.8	15.3	12.4
47	30.6	5.9	25.5	13.3	29.5	8.4	28.7	17.8	23.6	8.1	37.9	4.5
48	28.2	5.9	30.6	6.1	○ 50.6	8.4	○ 41.1	5.4	30.4	6.8	35.6	5.1
	N＝85		N＝98		N＝166		N＝129		N＝148		N＝177	

表 5　自校の教育に対する学生の期待（項目リスト）

学校＼項目	期待する項目（「必要不可欠」反応者40％以上）			期待しない項目（「重要でない」反応者40％以上）		
	a 知的学習	b 情緒と道徳の発達	c 実生活上の能力	a 知的学習	b 情緒と道徳の発達	c 実生活上の能力
A 短大	日本語能力（読む力・書く力・話す力） 専攻領域に関する基礎知識 合理的思考力 知的寛容（果敢な探究心）	心理的健全さ 他人理解 価値観とモラル	達成意欲 リーダーシップ（責任遂行力） 職業生活の準備（知識・技能） 家庭生活の準備（育児能力）		宗教的関心	
B 短大	日本語能力（話す力） 専攻領域に関する基礎知識	他人理解	職業生活の準備（知識・技能） 家庭生活の準備（育児能力）		宗教的関心	
C 高専	日本語能力（読む力・書く力・話す力） 外国語能力（読む力） 数理能力（数学・統計） 専攻領域に関する基礎知識 合理的思考力 知的寛容（自由な思考・果敢な探究心） 創造性 継続的学習意欲	自己発見 心理的健全さ 他人理解 価値観とモラル	達成意欲 未来志向 適応性 リーダーシップ（責任遂行力） 職業生活の準備（知識・技能） 家庭生活の準備（育児能力） 健康		宗教的関心	
D 高専	日本語能力（読む力・書く力・話す力） 外国語能力（読む力） 数理能力（数学） 専攻領域に関する基礎知識 合理的思考力 知的寛容（自由な思考・果敢な探究心） 創造性 継続的学習意欲	心理的健全さ 他人理解 価値観とモラル	達成意欲 未来志向（計画能力） リーダーシップ（責任遂行力） 職業生活の準備（知識・技能） 健康		宗教的関心	
E専門学校	日本語能力（書く力・話す力） 専攻領域に関する基礎知識 合理的思考力 知的寛容（果敢な探究心）	自己発見 心理的健全さ 他人理解 価値観とモラル	達成意欲 適応性（処理能力） リーダーシップ（責任遂行力） 職業生活の準備（知識・技能）		宗教的関心	
F専門学校	日本語能力（読む力・書く力・話す力） 数理能力（数学・統計） 専攻領域に関する基礎知識 合理的思考力 知的寛容（自由な思考・果敢な探究心） 継続的学習意欲	自己発見 心理的健全さ 他人理解 価値観とモラル	達成意欲 適応性（処理能力） リーダーシップ（責任遂行力） 職業生活の準備（知識・技能）		宗教的関心	

1. 在校生の自校の教育に対する期待

広い意味での高等教育の目標として設定した42の資質・能力項目に対して、短大・高専・専門学校の学生がどの程度修得することが重要と考えているかを調べた。この設問の趣旨は、学生の修得欲求によって自校の教育に対する学生の期待の内容を抽出しようとしたものであり、それらが学校種別により違いがみられるかという関心も同時にあった。先にも述べたように、今回は度数分布（比率）を使って、そうした趣旨の情報をみることにするが、その結果を「自校の教育に対する学生の期待」として表4、5に整理した。

表4は見やすくするために「必要不可欠」回等者と「重要でない」回等者についてだけその比率を示した。表中、縦軸には資質・能力項目の番号及び横軸には学校名と反応型を配している。さて、比率の読み方であるが、われわれは一応資質・能力項目のうち「必要不可欠」反応型が40％以上の項目を拾い、それらを当該学校に対する学生の期待とみなすことにした。40％の線は回答者数の規模（最高はF校の177名、最低はA校の85名）及び反応型に対する比率の散らばり（均等に散らばる場合は3つの反応型は各々約33％）を考慮して決めたもので、要するに4割以上という数値にわれわれが重要さを認めたと言う他ない。

その4割以上の項目を拾って学校別に整理したのが表5である。以下、表5を主とし表4を従にして各校の学生の期待をみていく。

まず6校にほぼ共通してみられる期待の項目は、次のように列挙できる。

a．知的学習：(1)日本語能力（読む力・話す力）、(2)専攻領域に関する基礎知識、(3)合理的思考力、(4)知的寛容（Q.20の果敢な探究心）

b．情緒と道徳の発達：(1)心理的健全さ、(2)他人理解、(3)価値観とモラル

c．実生活上の能力：(1)達成意欲、(2)リーダーシップ（責任遂行力）、(3)職業生活の準備（必要な知識・技能の修得）

これら項目のうち少なくとも4校の学生グループが50％以上の比率でもって回答しているのは次の通りである。

a．知的学習：(1)日本語能力（話す力）、(2)専攻領域に関する基礎知識

b．情緒と道徳の発達：(1)他人理解

c．実生活上の能力：(1)職業生活の準備（必要な知識・技能の修得）

各校の学生集団とも知的学習面に限らず、情緒と道徳の発達・実生活上の能力の面に関しても多様な期待を寄せていることがわかる。中でも、知的学習面で「自分の考えを筋道をたてて話す能力」と「自分の専門とする領域に関する基礎知識を充分にもつ」といった自己表現力や専門教育への期待は、学校種別を問わず過半数以上の学生集団にみられると考えられる。同じことが、情緒と道徳の発達の面で「他人に対する共感や思いやり・協調性を養う」という愛他心(altruism)の涵養に対する期待に、また実生活上の能力の面で「希望転種に関する知識・技能を身につける」という職業教育に対する期待にも認められる。

期待に関する6校の学生集団の全体的な傾向を共通点という軸によってみれば、以上のように整理できる。なお、これから一歩進んだ分析として、そのような期待を担う学生集団の構成を問うという問題が残る。例えば、同じ知的学習に対する期待でも、自己表現力を期待する集団と専門教育を期待する集

団とはどの位重なるのか。あるいは自己表現力を期待する集団と愛他心の涵養を期待する集団とはどの程度合致するのか等である。従って、こうした視点から各学校別にそうした集団の構成を点検する作業が必要となるが、これに関して今回は割愛したい。この視点からのデータ分析は次に記す各校別の学生集団の期待をみる際も同様に行わないことにする。

図表5から各学校別の学生集団の期待に違いを認めるとすれば、第一に高専グループのC校・D校に外国語能力（読む力）への期待がみられる点である。数値をみると、知的学習面で外国語の読解力を期待する比率が高専のC校44.0％、D校43.4％であるのに対し、短大のA校16.5％、B校35.7％、専門学校のE校25.0％、F校19.2％である。短大のB校は高専グループにやや近い比率であるが、他の各校はかなり低い比率である。

第二に、同じく知的学習の面で創造性に対する期待が高専グループにだけ認められる。数値の上では、高専のC校48.2％、D校46.5％に対し、短大A校12.9％、B校30.6％、専門学校E校27.7％、F校32.8％である。B校とF校は3割の比率に達してはいるが、高専グループとの比率の差は15％もある。

第三に、実生活上の能力の中の未来志向に属する項目だが、「事前に慎重に準備し計画する能力を養う」という計画能力への期待も高専グループにだけ認められる。しかし、数値をみると、高専のC校47.0％、D校41.9％に対し、短大A校32.9％、B校28.6％、専門学校E校38.5％、F校39.5％となっていて、先の外国語の読解力や創造性への期待にみられたように、高専グループと他のグループとの間には、それ程大きな比率の差はない。その他、実生活上の能力の面で、健康つまり心身のケアに必要な知識の修得が高専グループの期待として認められる。とくにC校は50.6％と高い比率を示している。

心身のケアに関する期待と並んで家庭生活の準備とくに育児能力に関する期待にも高い比率を示す学校集団が存在している。この期待は短大グループ2校及びC校の学生集団に顕著にみられる。数値をみると、短大A校40.0％、B校42.9％、高専C校42.2％となっている。この傾向は集団の中にいる女子学生の属性が効いた結果ではないか、と一見考えられるかも知れない。これについてはクロス集計をみれば明らかになるが、今回、その処理はしてないので、代わりに各校の学生集団に占める女子学生の比率をつき合わせてみる。

まず、短大A校45.9％で約半数の規模を示しているが、B校3.1％、高専C校3.0％とこの2校はきわめて少数である。また、女子学生が皆無かそれに近い残り3校も育児能力に関する期待が3割前後はある。従って、これら数値が示すところをみる限り、育児能力に関する期待と女子学生属性との強い関係は主張できない。

さて、学生の期待に関する各校間の違いに着目して記してきた。この相違点で目立つものとして最後に挙げられるのが、高専グループ2校に期待の項目が多いという点である。短大のB校を除けば残り5校とも確かに期待の項目数は多いと感ずるが、高専2校は特に目立つのである。項目数を挙げてみると、高専C校26項目、D校19項目に対して、短大A校14項目、B校はわずか5項目、そして専門学校E校13項目、F校17項目である。しかも高専2校は項目数の多さに限らず、項目の一致度が高く（19項目まで一致する）、かつ各項目に対応する比率も高いのが目立つ。例えば、高専C校の場合は話す力としての日本語能力・専攻領域に関する基礎知識への期待が8割を超え、書く力としての日本語能力・他人理解（愛他心の涵養）への期待は7割を超えている。

期待の項目が多くかつ項目に対応する比率も高いという傾向は、高専グループ2校に一致してみられる訳だが、その傾向は順に専門学校グループそして短大グループとなっているように思われる。ただ短

大A校と専門学校E校、高専D校と専門学校F校は項目数及び項目に対応する比率の高さの点でかなり類似した傾向がみられるので、学校種別間の相違にこだわる積りはない。しかし、高専C校と短大B校との学生集団の期待感に関して差異があるというのは多分間違いないであろう。この個別学校間の差が学校種別属性に関係しているのか興味はあるが、これ以上の分析には今は立ち入らない。

以上、度数分布（比率）を利用して6校の学生集団の期待に関する情報をある程度まで詳細に記述・分析した。落ちた情報もあると思うが、それは今後の分析にまつとする。ここでは今まで抽出した情報に関しての感想を述べてみたい。なおその際、統計上の処理の問題への言及についても一応残された課題として置くことにする。

第一に、6校に共通な期待の項目（40%以上という操作をして拾ったものであるから、おのずから限界はある）をみて感じたのは、知的学習面に関して一般教育科目に対応した知識・教養に対する期待がみられないという点である。例えば「伝統的な西洋文化・東洋文化についての基礎的理解をもつ」、「現代の人文・社会・自然の諸科学、芸術などについての基礎的理解をもつ」という項目は6校ともに低い比率で最高20%台、最低は一桁である。各校とも専攻領域に関する基礎知識への期待が高率であるだけに却ってコントラストが強い。これは工学系学生集団を対象に選んだことからの結果と判断できる余地もあるが、他面、専門教育偏重逆に言えば一般教育軽視の風潮の現われとみることもできる。

第二に、高専2校の学生集団の中に読む力としての外国語能力への期待がみられるが、この傾向は6校間の個別学校レベルの違いというよりも、むしろ学校種別レベルの違いに起因するのではないかとの感想をもった。つまり、高専教育と短大及び専門学校教育の知的学習面での方向性の違いが学生集団の外国語能力への期待の中に表現されていると思われる。

第三に、専門学校に対するイメージは未だ流動的で捉え難いものがあるが、学生集団の期待をみる限り、高専と短大の中間に位置するような感じを受け、ある意味での戸惑いを印象としてもった。

第四に、実生活上の能力で職業生活の準備（知識・技能の修得）への期待が6校全てにみられる傾向は、短大・高専・専門学校に対する既存のイメージに沿うものと思われた。しかし、短大2校及び高専1校でみられた家庭生活の準備（育児能力）への期待は、意外な感をもった。この期待を抱く学生集団が知的学習や情緒と道徳の発達面では、どのような項目を選んでいるのか、という関心を今後のデータ分析で追ってみたい気がした。

2. 在校生の評価による自校教育の貢献

調査対象者は各校の最終学年に在籍する学生集団（F校のみ1年次生徒を含む）を選んであるが、先に述べた大学教育目標として設定した42項目各々について修得度を尋ねるという別の角度の設問を行った。修得の重要度を尋ねた結果は各校教育への学生の期待として整理し、分析してきたが、修得度自体つまり修得意識を尋ねた結果は学生の評価を基にした各校教育の貢献度をみるものとして整理・分析する。つまり在学生の目からみた各校教育の貢献をみるということである。なお、調査データの整理・集約は前節と同じ手法で相対度数分布表（比率表示）によった。

表6は「学生の評価による自校教育の貢献」と題した各校別の比率表示のリストである。回答者の反応型は3段階の順序尺度を用意したが、全体的な集団の傾向を把握したり、分析の便宜をはかるために次のような操作を行っている。「充分に身についた」と「ある程度身についた」の反応型に対応する

表6　学生の評価による自校教育の貢献（相対度数分布表）

㊟　○印は約80％以上の項目　●印は約60％以上の項目
100％＝「身についた」（「充分に」＋「ある程度」）＋「身についていない」＋N．R．

項目＼学校	A短大		B短大		C高専		D高専		E専門学校		F専門学校	
	身についた	身についていない	身についた	身についていない	身についた	身についていない	身についた	身についていない	身についた	身についていない	身についた	身についていない
Q 7	67.1	32.9	○ 89.8	10.2	○ 86.8	13.3	○ 89.2	9.3	71.6	28.4	○ 84.2	15.3
8	62.4	36.5	76.6	23.5	75.9	24.1	○ 85.3	13.2	79.7	19.6	79.1	20.3
9	78.8	21.2	77.6	22.4	○ 80.1	19.9	74.4	24.0	73.7	25.7	76.9	23.2
10	29.4	● 70.6	50.0	50.0	36.7	● 63.3	41.9	56.6	23.0	● 77.0	22.1	● 77.4
11	21.2	● 77.6	37.7	● 62.2	25.9	● 74.1	24.0	● 74.4	19.0	● 81.1	22.6	● 77.4
12	5.9	● 94.1	32.6	● 67.3	6.0	● 93.4	5.4	● 93.0	11.5	● 88.5	11.8	● 87.6
13	66.5	23.5	○ 89.8	10.2	○ 88.0	12.0	○ 87.6	10.9	75.1	14.9	○ 83.0	16.9
14	○ 83.6	16.5	○ 85.7	14.3	○ 88.0	11.4	75.6	23.3	○ 81.8	18.2	78.0	21.5
15	45.9	54.1	70.4	26.9	60.8	38.6	50.4	48.1	52.1	48.0	58.1	41.2
16	60.0	40.0	○ 81.6	18.4	62.6	37.3	61.3	37.2	58.8	41.2	70.0	29.9
17	○ 81.2	18.8	○ 87.8	12.2	○ 87.4	12.0	○ 90.7	7.7	○ 83.1	16.9	○ 84.2	15.3
18	○ 89.4	10.6	○ 90.8	9.2	○ 89.2	10.8	○ 94.6	3.9	○ 86.5	13.5	○ 86.3	12.4
19	○ 89.4	10.6	○ 90.9	9.2	○ 88.0	12.0	○ 86.1	12.4	○ 81.1	18.9	○ 84.2	15.3
20	71.8	28.2	77.5	22.4	72.9	27.1	78.3	20.2	60.8	39.2	75.9	22.6
21	78.8	21.2	○ 85.7	13.3	○ 81.3	18.7	○ 86.0	12.4	75.7	23.0	○ 82.5	16.4
22	76.5	23.5	○ 89.8	10.2	72.3	27.7	72.9	25.6	64.2	35.8	72.3	27.1
23	68.2	31.8	75.5	24.5	62.6	37.3	64.3	34.1	56.1	43.9	61.6	38.4
24	○ 81.1	18.8	○ 84.7	15.3	79.6	20.5	○ 83.7	14.7	63.6	26.4	○ 86.5	13.0
25	○ 89.4	10.6	○ 89.8	10.2	○ 87.4	12.7	○ 93.0	5.4	○ 84.5	15.5	○ 88.1	11.9
26	72.9	27.1	○ 81.6	18.4	73.4	25.9	74.4	24.0	65.5	33.1	○ 80.2	18.6
27	○ 88.3	11.8	○ 84.6	15.3	78.9	21.1	○ 86.0	12.4	77.0	22.3	○ 86.5	13.6
28	○ 92.9	7.1	○ 94.9	5.1	○ 94.6	5.4	○ 93.1	5.4	○ 89.2	10.1	○ 92.7	6.8
29	○ 84.7	14.1	○ 87.7	12.2	○ 89.8	10.2	○ 86.8	11.6	77.0	22.3	○ 89.3	9.6
30	34.1	● 65.9	56.1	43.9	36.7	● 63.3	38.0	● 60.5	27.1	● 72.3	41.8	57.6
31	78.8	18.8	○ 84.7	15.3	72.9	27.1	70.6	27.9	58.7	39.9	71.2	27.7
32	○ 84.7	15.3	○ 84.6	15.3	○ 88.0	12.0	○ 87.6	10.9	○ 83.7	15.5	○ 83.0	15.8
33	○ 88.2	11.8	○ 82.7	17.3	○ 80.8	19.3	72.1	26.4	73.0	26.4	79.1	19.8
34	○ 81.2	18.8	○ 83.7	16.3	78.3	21.7	74.4	24.0	75.0	23.6	78.6	19.8
35	73.0	27.1	78.5	21.4	74.7	25.3	79.1	19.4	66.3	32.4	77.4	22.0
36	○ 88.2	11.8	○ 83.7	16.3	○ 82.0	18.1	○ 80.6	17.8	76.4	23.0	○ 83.1	16.4
37	○ 91.8	8.2	○ 84.7	15.3	○ 89.2	10.8	○ 85.3	12.4	79.1	20.3	○ 86.5	12.4
38	55.3	44.7	66.3	33.7	54.2	45.2	65.1	33.3	52.7	45.9	49.1	48.6
39	51.8	48.2	68.4	31.6	48.8	50.6	51.2	47.3	48.7	50.7	58.8	40.7
40	38.8	● 61.2	62.3	37.8	25.3	● 73.5	34.9	63.6	31.7	● 67.6	41.8	57.1
41	75.3	24.7	○ 87.8	12.2	75.3	24.7	○ 84.5	14.0	74.4	25.0	○ 85.3	13.6
42	○ 83.5	16.5	○ 87.7	12.2	73.5	26.5	○ 82.1	16.3	74.3	25.0	○ 84.2	15.3
43	58.8	41.2	67.3	31.6	54.2	45.8	48.1	50.4	55.4	43.2	64.4	35.0
44	49.4	49.4	60.2	38.8	42.1	57.8	39.6	58.9	44.6	54.7	54.8	43.5
45	64.7	35.3	69.4	29.6	45.8	54.2	47.3	51.2	58.1	40.5	62.8	35.6
46	74.1	25.9	77.5	22.4	71.6	28.3	74.4	24.0	73.2	27.7	73.4	26.0
47	56.5	43.5	68.4	31.6	58.4	40.4	63.6	34.9	56.2	41.9	77.4	21.5
48	78.8	21.2	○ 88.7	11.2	○ 89.2	10.8	○ 82.2	16.3	70.3	29.1	○ 80.8	18.6
	N＝85		N＝98		N＝166		N＝129		N＝148		N＝177	

表 7　学生の評価による自校教育の貢献（項目リスト）

学校＼項目	貢献が評価された項目（「身についた」反応者の80％以上）			貢献が評価されない項目（「身についてない」反応者の60％以上）		
	a 知的学習	b 情緒と道徳の発達	c 実生活上の能力	a 知的学習	b 情緒と道徳の発達	c 実生活上の能力
A 短大	数理能力（統計） 専攻領域に関する基礎知識 合理的思考力 知的寛容（自由な思考） 継続的学習意欲	自己発見 心理的健全さ 他人理解 価値観とモラル	達成意欲 未来志向 適応性（協調的能力） リーダーシップ 職業生活の準備（職場適応力）	外国語能力	宗教的関心	市民性
B 短大	日本語能力（読む力） 数理能力（数学・統計） 現代的な知識・教養 専攻領域に関する基礎知識 合理的思考力 知的寛容（自由な思考・多元性の認識） 継続的学習意欲	自己発見 心理的健全さ 他人理解 価値観とモラル 趣味・行儀作法の洗練	達成意欲 未来志向 適応性（協調的能力） リーダーシップ（責任遂行力） 職業生活の準備 健康	外国語能力（聞く力・話す力）		
C 高専	日本語能力（読む力・話す力） 数理能力（数学・統計） 専攻領域に関する基礎知識 合理的思考力 知的寛容（自由な思考・多元性の認識）	自己発見 他人理解 価値観とモラル	達成意欲 未来志向（計画能力） 適応性（協調的能力） リーダーシップ（責任遂行力） 健康	外国語能力	宗教的関心	市民性
D 高専	日本語能力（読む力・書く力） 数理能力（数学） 専攻領域に関する基礎知識 合理的思考力 知的寛容（自由な思考・多元性の認識） 継続的学習意欲	自己発見 心理的健全さ 他人理解 価値観とモラル	達成意欲 適応性（協調的能力） リーダーシップ（責任遂行力） 職業生活の準備 健康	外国語能力（聞く力・話す力）	宗教的関心	市民性
E 専門学校	数理能力（統計） 専攻領域に関する基礎知識 合理的思考力 知的寛容（自由な思考）	自己発見 他人理解	達成意欲	外国語能力	宗教的関心	市民性
F 専門学校	日本語能力（読む力） 数理能力（数学） 専攻領域に関する基礎知識 合理的思考力 知的寛容（自由な思考・多元性の認識） 継続的学習意欲	自己発見 心理的健全さ 他人理解 価値観とモラル	達成意欲 適応性（協調的能力） リーダーシップ（責任遂行力） 職業生活の準備 健康	外国語能力		

比率を合計して「身についた」という新しい反応型を設定した。その結果は「身についた」と「身についてない」の2つの反応型になる。既設の「ある程度身についた」の反応型に対する比率はかなり高くなるので、新設の「身についた」反応型については80％以上の比率が現われた項目を、各校の教育が貢献したものと認めた。これに対し既設の尺度の「身についてない」反応型は、60％以上の比率を示す項目を拾って、これを各校の教育の貢献が認められない領域とした。これら情報を整理し表にしたのが表7である。以下、表7を主に表6を従にしながらみていくことにする。

各校ほぼ共通に（少なくとも4校以上）貢献していると評価された項目は、次のように列挙できる。

a. 知的学習：(1)数理能力（数学あるいは統計）、(2)専攻領域に関する基礎知識、(3)合理的思考力、(4)知的寛容（自由な思考あるいは多元性の認識）、(5)継続的学習意欲

b. 情緒と道徳の発達：(1)自己発見（Q25の自己認識）、(2)心理的健全さ、(3)他人理解、(4)価値観とモラル

c. 実生活上の能力：(1)達成意欲、(2)適応性（協調的能力）、(3)リーダーシップ（責任遂行能力）、(4)職業生活の準備（職場適応力）、(5)健康

これら項目のうち合理的思考力（知的学習面）及び自己発見の中の自己認識並びに他人理解つまり愛他心（情緒と道徳の発達の面）は、多くの学校で90％前後の比率に達している。このことから、6校の学生集団に共通に評価される貢献の項目の中でも、知的学習の「事実を独断や感情をまじえず、客観的にみる力を養う」、情緒と道徳の発達の「自分の能力・志望・価値観を知る」及び「他人に対する共感や思いやり・協調性を養う」という3つの項目は、より強い普遍性が感じられる。

各項目の相違点に目を転ずると、まず第一に目立つ点が、貢献したと評価された項目数の多少である。短大A校15項目、同じくB校24項目で6校中最も多い。次に高専C校16項目、D校18項目そして専門学校E校7項目は6校中最も少ない。最後の専門学校F校は18項目である。短大B校と専門学校E校の項目数の差は18と大きく開き、このデータでみる限り学生の評価においてB校とE校との間には顕著な差がみられる。

B短大の場合、「現代の人文・社会・自然の諸科学、芸術などについての基礎的理解をもつ」（現代的な知識・教養）、「洗練された趣味や礼儀作法を身につける」（趣味・行儀作法の洗練）の項目は、残り5校にみられない個性的な傾向と映る。数値でみると、現代的な知識・教養の比率はB短大81.6％に対しA短大60.0％、C高専62.6％、D高専61.3％、E専門学校58.8％、F専門学校70.0％である。F専門学校を除けばB短大と他校との比率の差は20％であり、はっきりした傾向と言えそうだ。他方、趣味・行儀作法の洗練の比率は、B校84.7％に対しA短大78.8％、C高専72.9％、D高専70.6％、E専門学校58.7％、F専門学校71.2％である。E専門学校を除き、他校との違いがはっきりした傾向となって現われているとまで断言し難い。

以上、在校生の修得意識をみることで各校教育の貢献の内容を明らかにした。勿論、そうした貢献はフォーマルな教育・学習の場面に限らず、学生生活というインフォーマルな場面をも含む広い環境の中でなされることを前提にしている。従って、貢献の内容についての各校の差は即ち各校教育そのものの質的差を意味するとは言えないだろう。なぜなら、貢献の内容の差は各校の在校生の行動様式のあり方によっても多様かつ大きな差違が生ずると考えられるから。今後の分析の方向も、そうした学生集団の問題に関連して進めることが必要であろう。

結びにかえて

学生の期待及び学生の評価による自校教育の貢献という2つの角度から同一の42項目に対する各々の反応結果を独立させた形で述べてきた。度数分布により各々のデータを各々の手続き及び基準で操作し、各集団が顕示する傾向を紹介・報告するだけで終わったが、今後はクロス集計の手続きなどによる更に立入った分析が必要となろう。なお期待及び貢献に関して得られたデータをみると、クロス集計をする場合には、ある項目に対して期待する学生集団はその項目の修得意識をどのように顕示し、引いては自校の教育の貢献をどう評価するのか、という分析の方向が有効なものであろうと考えられる。

（池田）

〔注〕

(1) その結果は、次ぎの論文で発表した。中島直忠・池田輝政・松永裕二「学生の大学教育に対する期待（「教育行政学研究」創刊号、教育行政学研究会、1979）

(2) Howard R. Bowen, 1977, Investment in Learning(Jossey-Bass Pub.)